

3年2組のクラスのテーマ「みんなで〇〇しませんか」

五十嵐 敏文

1. 担任としての一年間の見直し

「みんなで〇〇しませんか」を通して

■理科を学ぶ楽しさを実感させたい

■クラスみんなで学び活動することの楽しさを実感させたい

以上の二つが3年2組の担任としてこの一年間大切にしていきたいことである。「みんなで〇〇しませんか」の活動をクラスのテーマとして定着させ実践していきたいと考えているため、担任からの話題提供や活動の提案をしたり、子どもたちの願いや求め、問いを積極的に引き出したりしていききたい。低学年教室での朝の会では、活動を創り上げていくきっかけになる子どもからの投げかけ「みんなで〇〇しませんか」という言葉を聞くことが多々ある。同じような場面やこのような子どもの姿は、高学年の藤棚の活動の仲間集めの場面でも見られるなど、世田谷小で大切にしてきた一つの活動、そして子どもたちの姿であろう。低学年総合で培ってきた力や活動を最大限に発揮し、一時間や二時間で終わるショートな活動や、準備や実践に時間のかかるロングな活動など、とにかくダイナミックな活動を子どもとともに創り上げていきたい。また、理科好きな子どもを育てるためにも「みんなで〇〇しませんか」では、理科の学習内容に結びつく活動も教師から積極的に提案をして取り入れていきたい。生活に身近な活動から理科の学習へと結びつけることにより、理科を学ぶ楽しさを実感させたいと考えている。またその反対として、理科で学んだ学習の発展的な学びを「〇〇しませんか」で扱うことも考えられる。学習したことを生かすことができる経験は、学ぶ意義を見出すことにもつながるであろう。

また、「みんなで〇〇しませんか」の活動は、クラスの他者がどのようなことを考えどのような〇〇をみんなでしたいのかを知るきっかけとなる。自分はクラスのみならずどのような〇〇をしたいのかを考える機会となるなど、他者理解や自己実現の機会にもなり、他者意識の高まりを期待することもできる。

とにもかくにもこの一年間、3年2組では「みんなで〇〇しませんか」を学級経営の軸として、担任も子どもとともに学びや活動を楽しめ成長していけるクラスを目指したい。

2. クラスのテーマのスタート

ある日の朝の会で、担任から子どもたちに「理科室へ行ったことがある人？」と問いかけた。昨年度までの二年間、理科専科として理科室で授業を行っていた私は理科室や理科室で行われている授業の魅力子どもたちに伝えられる経験があった。そこで、その問いかけに続き「理科室で実験（水中シャボン玉・ダイラタンシー現象）をやってみませんか？」と子どもたちに提案した。「みんなで〇〇しませんか」という低学年からの活動が3年生になってからも継続して行うことができるんだということに気付かせたり、提案をしてもいいんだという安心感を与えたりしたいと考えていたためもある。子どもたちからは「やりたい！！」という予想通りの返事が返ってきたので、担任のプロデュースの元、理科室にて「みんなで理科実験をしませんか」が行われた。

子どもたちにとって一人の他者である3年2組の担任は理科を専門とする先生であり理科について

質問することができる先生であるということが子どもたちに認識される機会となった。今回の活動は、クラスのテーマや他者意識を育てるという視点での導入になったと考えている。

3. クラスのテーマの確立

ある日の朝の会、まさたかくんが「みんなで遊びませんか？休み時間はそれぞれ他のクラスの友達と遊んだり、その他にやりたいこともあったりするだろうから、授業の時間を使ってドロケイでみんなと遊びたいです」とみんなに問いかけた。担任の願ってもいないチャンスであった。「いいよ！！」という元気な声で返事が返ってきたそのとき、「みんなで〇〇しませんか」の活動が3年2組に確立したと感じた。また、まさたかくんの言葉にはいくつかの他者を意識する嬉しい言葉があった。



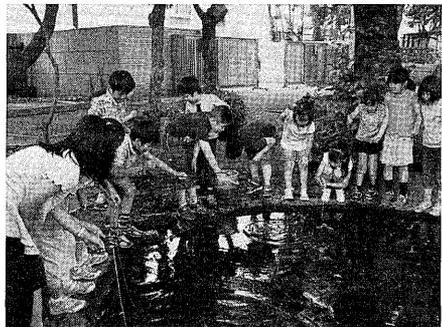
一つ目は「休み時間はそれぞれ他のクラスの友達と遊んだり、その他にやりたいこともあったりするだろうから」という言葉である。友達の思いを大切にしているからこそこの言葉であり、また、まさたかくんの優しさが伝わってくる担任として嬉しい言葉であった。

二つ目は、「みんなでドロケイをしませんか」という言葉である。まさたかくんが得意で好きなスポーツはサッカーであるが、サッカーではなくあえて鬼ごっこを選んだことを不思議に思い、「なぜ、サッカーではなかったの？」と聞いてみた。すると、「サッカーだと、苦手とする女の子や男の子が多いし得意な人しか楽しめないかなと思って」と答えた。自分のことを一番にして物事を考えていくのではなく、みんなが楽しめるものは何かを考え選ぶことができたまさたかくんの言葉は嬉しく思った。

4. クラスのテーマ その2

次に提案したのはりょうくんであった。提案内容は「みんなでザリガニ釣りをしませんか」。3年生理科の学習内容である「チョウを育てよう」や「昆虫のからだのつくり」につながるものであった。

りょうくんはクラスがざわざわしていたため「お話ししてもいいですか？」と言い、ザリガニ釣りの方法や餌、そしてこつなどを話した。みんながお話を聞いてくれるまで待つなど、周りをしっかり見ながら話をする事ができた。話の中にはりょうくんだからこそ知っていることが含まれていた。それは、藤が池の深さである。クラスの友達の中から「どれくらいの糸の長さが必要なの？」という質問が出た。以前に藤が池へ落ちたことがあるりょうくん。その経験から「ほくのおへそくらいの深さだよ」と言いおへそを指した。クラスの子どもたちはりょうくんのその姿から、「それくらいなのかぁ」「りょうくんのおへそを見ながら糸を切れればいいんだね」などと、りょうくんの姿を笑うのではなく、実際に池へ落ちたことがあるりょうくんの説明に納得し場が和んでいた。場を和ませることができるのもりょうくんの良さであると認識された。百聞は一見にしかずではないが、経験以上に説得力のあるものは子どもたちの世界にはないようである。



ちなみに、藤が池には30匹以上のザリガニがいた。生き物が苦手な女の子であってもザリガニを釣った後は男の子に「捕まえて！」とお願いするなど、ザリガニに触れなくてもたくさん釣るという経験は非常に楽しかったようである。生き物が得意な〇〇くん、生き物が触れない〇〇さんなど、少しではあるが子どもたちは他者理解を図ることができたようである。